

## 質的調査に関わる教育課題とは何だろうか

— 他者の「痛み」への感受性をめぐって —

井上 芳保

調査のフィールドとは調査者がさまざまな人と出会い、さまざまな反応に直面する中で定まっていく動的なものであり、調査者が一方的に決めることはできない。インタビューによって得られる「語り」とは常に動的な関係性の中で構成されたものであり、インタビューする側とされる側との関係性次第でいかようにも変わりうる。ライフヒストリー研究には、これまで無視され、聞かれることのなかった被差別者やマイノリティの声を聞き取れるという利点がある。この利点を活かした場合にこそ、質的調査というアプローチは大きな意味を持つてくる。他者の「痛み」への感受性が要求されるという意味で質的調査は「臨床」の領域と親和的である。これらのことが教育課題にも反映されねばならない。

### はじめに

本稿は、2004年度の「質的調査方法論・同基礎演習」の担当者の一人としての総括である。この科目の授業内容をよりよいものにしていくことが執筆の動機であり当面の目的であるといえる。したがって、この授業でしてきたこと、あるいはするつもりでいて結局、十分にできなかったことを反省的に振り返ってみる作業を基本としている。だが、そのような作業を通して、我々が「質的調査」という語を冠したこの科目にて学生たちに教育しなければならないことは何か、という大きな問いとも向き合うことになるだろう。

実は「質的調査」とされるものの内実は多様であり、さまざまな方法がある<sup>(1)</sup>。これまでの「質的調査方法論・同基礎演習」では、インタビューとフィールドノーツのつけ方を重点的に教えてきたが、質的調査の方法はむしろこの二つに尽きるものではない。例えば、

取材や編集というジャーナリストの作業も質的調査に隣接したものといえるし、そこから学び取れるものは少なくないと思われる。後述するように2004年度の授業の場合、このアプローチを意識的に取り入れた。

しかし、今回、問おうとしているのは必ずしも方法のことではない。多様な方法がある中でこの授業において何をどのように取り上げるべきなのかという問題も以前から積み残したままになっているが、さまざまな方法のあれこれを比較して優劣をつけることがここでの目的なのではない。いったい質的調査とは何だろうか、それはいったい何のためにあるのだろうか。結論を先に書けば、この問いを深めていくなら、質的調査というものに特有の利点が明確になり、この名称を冠した科目群において教えなければならない課題として、他者の「痛み」への感受性を磨くということが浮上してくるのではないかと私は考えている。以下、そのように言える事情について

<sup>(1)</sup>INOUE Yoshiyasu 札幌学院大学社会情報学部

て順を追って説明していきたい。

## 1. 2004年度「質的調査方法論・同基礎演習」の授業内容

2001年度からの現行のカリキュラムに移行して以降、「質的調査方法論・同基礎演習」は2年生以上が履修する科目であり、過去三回にわたって開講されている。2002年度は石井教員と小内教員が、2003年度と2004年度は石井教員と私が担当している。いずれの場合もTAとして院生4人が学生の指導に関わる体制がとられている。

石井教員と小内教員が担当した初年度の2002年度以来の「伝統」としてこの科目では山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』をテキストまたはそれに準ずるものとして使ってきた。2004年度の場合、扱う章は限定されたが、下記に見るようにそれでもまだかなりこのテキストを使っているといえる。

履修人数は70人前後であり、大教室での授業と6つのクラスに分かれての少人数によるゼミ室での学習とを組み合わせで行われている。2002年度の開設以来、この授業の場合、学外でのフィールドワークの機会とは例外的なものに限られており、実習は原則として学内で行うことになっている。予算もそのようにしか配分されていない。

この科目を履修した学生のうち、約20人ほどが次の学年で「質的調査設計・同演習」を履修する(2003, 2004, 2005年度は小内教員担当)。この授業では学生が自ら調査計画を立て、学外に出て調査をする。やはりTAとして院生が指導を補助している。いわば応用編といえる。「質的調査方法論・同基礎演習」は、「質的調査設計・同演習」をも履修する学生にとってはそれへの一つのステップとなる。また「質的調査設計・同演習」を履修しない多くの学生にとっては「質的調査」を学ぶ最後の機会となる。いずれの場合も、「質的調査」

についての基礎的な学習の場として「質的調査方法論・同基礎演習」は本学部の社会調査教育の中で重要な意味を有しているといえよう。

以下に記すのは、2004年度前期に石井教員と私とによって行われた全14回の授業内容の概要について私のメモを元に作成したものである。この授業は月曜日の午前中に2コマ連続で行われた。①とは1コマ目、②とは2コマ目を指す。前期開講のため仕方ないことだろうが、履修希望者が徐々に増え、クラス別のメンバーがなかなか固まらなかった。その記録もとってあるので、最初の4回については履修希望人数を記入しておく。

### 第1回(4/12) 社会調査とは何か——なぜ何のための調査なのか

全体的なガイダンス、今後の進め方の説明、暫定的な6つのクラス分けなど。井上による配布資料：日常の体験の中に多々潜むフィールドワークの機会について。

(3/20 イラクへの自衛隊派遣反対デモでホームレスに絡まれた体験、SMクラブにてデイトレーダーと出会った体験など)、好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』目次とそこに収録の三浦執筆の「あとがき——生活世界のフィールドワークのために」紹介。学期末に個人レポート提出が課題であることを伝える。その際に取り組みたいテーマについて記入したものを提出。58名が出席し、履修希望。

### 第2回(4/19) 質的調査の方法としてのインタビュー(1)

①大教室：テキストから山中速人氏執筆の第6章「ハワイ日系二世老人たちの生活史を記録する」と第1章「人に聴く」を配布。山中氏出演のCD—

ROM教材視聴による学習。②クラス別：第1章を学習。新たに21名が履修希望。

第3回(4/26) 質的調査の方法としてのインタビュー(2)

①大教室：テキストから園田茂人氏執筆の第8章「日本人＝アジア人との人間関係ドラマを追う」を配布。園田氏出演のCD-ROM教材視聴による学習。補論として佐藤郁哉氏出演の暴走族調査のCD-ROM教材も視聴。②クラス別：第8章を中心に学習。新たに4名が履修希望。

第4回(5/10) 質的調査の方法としてのインタビュー(3)

①②ともクラス別：学生相互のインタビュー実習の準備(質問項目の作成)。それを使って各クラス内での相互インタビューの実施。新たに1名が履修希望。

第5回(5/17) 質的調査の方法としてのインタビュー(4)

①②とも大教室：全体による学生相互のインタビュー実習。クラス内でペアを作り、計4回実施。事実上、雑談、おしゃべりの時間になっていたペアもあった。このインタビュー成果をまとめたレポート課題については次回に提出とする。

第6回(5/24) 質的調査の方法としてのフィールドノーツの作成

①大教室：テキストから奥田道大氏執筆の第9章「越境する人と街空間を読み解く」、佐藤郁哉氏執筆の第3章「記録し分析する」を配布。奥田氏出演のCD-ROM教材視聴による学習。②ク

ラス別：第9章を中心に学習。

第7回(5/31) 質的調査の方法としての参与観察

①大教室：テキストから山本真鳥氏執筆の第2章「人と交わり観察する」、若林良和氏執筆の第5章「カツオ漁船の船上生活とコミュニケーションを探る」を配布。山本氏、若林氏出演のCD-ROM教材視聴による学習。②クラス別：第2章、第5章を学習。それぞれのクラスで教員、TAが自分のこれまでの調査体験を語る。

第8回(6/07) 取材と編集を学ぶ

①②とも大教室：ゲストとして『えぬびおん』編集長でフリー・ジャーナリストの斉藤克恵さんと斉藤さんが声をかけて連れてきた国境なき医師団メンバーの孫時空さんのお話を聴く。斉藤さんは読売新聞に連載した記事「木」の取材時、重度身体障がい者の取材時などの自らの実体験をエピソードと共に多々語る。アコーディオンと腹話術も披露。孫さんは日本のマスメディアがけっして写さない死体の写真などを紹介。フィールドワークと取材体験のお話から人と深くコミュニケーションをとることの大切さを学ぶ。斎藤さんの出した課題は、『おじいちゃん、死んじゃった』(教育画劇)に掲載の、爆撃を受けて肉親を失ったイラクの子どもたちの描いた絵画群を見、谷川俊太郎の文の朗読を聞いての「平和」についての文章作成ワーク。

第9回(6/14) 映像とドキュメンタリーから学ぶ

①②とも大教室：テキストから大森康宏氏執筆の第7章「フランス移動民族

マヌーシュを映画に撮る——少数民族の映像史」を配布。大森氏出演のCD-ROM教材視聴による学習。ジブシーの生活を描く画像から映像社会学の可能性について話す(石井担当)。水俣病に関わって自らの理想と政府の対応の板ばさみになった厚生官僚、難病になっても生活保護が受けられなかったホステス、この二人の人間の自殺を取り上げたドキュメンタリー番組「しかし……、福祉切捨ての時代に」の視聴と内容の検討(井上担当)。小レポートの提出を求める。その後、6/28実習に向けての12グループを編成。6クラスの中をさらに二つに分ける形で編成。インタビューの相手として協力してくれたのは、学生課2、就職課2、図書館1、臨床心理学研究科院生1、生協2、同窓会4<sup>(2)</sup>。希望が重なった場合は、抽選で決定。

#### 第10回(6/21) 学内でのフィールドワークのための準備

①②ともクラス別：12のグループ別に分かれて調査の準備。質問項目など調査の大枠をそれぞれのグループで設計。事前に相手方に伝えておきたい項目、資料を用意しておいて欲しい事柄などがあれば提出。

#### 第11回(6/28) 学内でのフィールドワーク実施

①②とも12のグループに分かれてフィールドワークを実施。本学同窓会の方4名のうち、1名(井上俊彌さん)が都合で来れなくなったため、そのグループのメンバーには他のグループのインタビューに同席してもらう。時間は原則として9:30~10:30。それぞれ終了後にクラスに戻ってその成果を

まとめる作業に入る。

#### 第12回(7/5) 公開の形でのインタビューの実施

①大教室：前回急用でインタビュー調査のできなかった、同窓会会長の井上俊彌さんをお招きしてインタビュアーと共に教壇に並べた椅子に座ってもらい、公開の形でインタビューを実施。インタビュアーは担当グループの学生2名。井上さんは、学生時代の体験、職業についてからの苦労話、転職の決断のこと、現在のお仕事のこと、同窓会のこと、学生たちへのメッセージなど熱く語って下さる。

②クラス別：インタビュー実習の補論。前回の成果をまとめたレポート課題の提出。

#### 第13回(7/12) ライフヒストリー研究と臨床社会学的視点についての講義

①大教室：配布資料により、前回の井上さんのインタビューの内容を復習した後、谷富夫論文「ライフヒストリーとは何か」谷編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』所収、蘭由岐子著「病の体験」を聴き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』の要旨を紹介。例えば、ある沖縄出身の甲子園球児による「もしあのとときサイレンが鳴らなければヒットを打てたかもしれない、野球を続けていたかもしれない」という「語り」から抽出されるエピソード(谷)、ハンセン病患者を最初にインタビューに訪れた時に患者からお茶を飲んでくれるかどうか凝視されていた体験(蘭)などから読み取れるものなどについて紹介(井上担当)。斎藤さんから6/21の授業のもようを新聞風に編集した「たんぼっぼ復活版」

(A4サイズ両面印刷)届く。裏面には「私という人間」の宇宙図を自由に記入する欄と授業の内容に触れた「平和について一緒に」記事も掲載。印刷して全履修生に配布。

②クラス別：個人別自由課題の進行状況の確認、アドバイス。

#### 第14回(7/19) 個人別自由課題の報告会

①、②ともクラス別：最終レポートを提出、その場でそのレポートの内容をクラスのメンバーを前に発表をする。

なお、履修登録者は最終的に83人であったが、実際に履修し続けたのは約70人。最終的に単位を取得したのは59人である。最終レポートを出していても欠席、遅刻が目立って多い者には単位を与えなかった。これは、出席を重視するという開講時に学生たちに与えた注意事項に忠実に従った結果である。

## 2. 総括に向けて — 不十分だった点の反省と今後の課題

### (1) 結局、できなかったいくつかのこと

予定していて結局はできなかったことから記しておこう。当初の予定では、第12回にて、テキストから山本真鳥氏執筆の第10章「観る側と観られる側の裂け目から — 調査者のモラルと課題」を取り上げる予定であった。ここに言う「裂け目」には著者が記述している以上の意味が実は含まれているのではなかろうか。そのように考えた私はさらにその機会にできれば、第1回にて紹介した三浦耕吉郎論文「カテゴリー化の罟」についても配布して補足しようということを考えていた。

また第13回には、その延長として、インタビュー行為の存立そのものを再検討する必要性について注意を促し、エスノメソドロジーの考え、会話分析の実際例、さらにゴフマンによる精神病院内にて参与観察を重ねた記

録などマイクロ社会学的な研究成果の中からフィールドワークにおいて留意すべきいくつかの事例などを紹介する予定であった。しかし、さまざまな要因が重なってこれらは結局、実現に至らなかった。

第1回では学生たちに対して、まだ殆ど白紙の状態であることを承知で出席の確認もかねて「今、やってみたい調査テーマ」について記述して提出してもらったし、学期末の最終レポートテーマについては、12グループに分かれてのインタビュー調査のテーマ以外にしても可ということにしたのだが、結局、第1回で提出したその通りに調査をした者はごく少数に限られたということも記しておきたい。この授業の履修後に「質的調査設計・同演習」を受けない多くの学生にとっては、「質的調査」の授業におけるフィールドワークとしては最後の機会となるはずなので、自発的な取り組みとしてこのような可能性を設けたことには十分な意義があると考えているが、それに応ずるだけのパワーを発揮できる環境に忙しすぎる学生たちは置かれていなかったということだろうか。

ちなみに第1回は、履修者が確定していない時点で行うものであり、ガイダンス的な話をする場であったが、私はそこにおいて、社会調査をするという行為は今の社会の実態を捉えていくための有効な手段であること、気をつけてみれば、考える材料やヒントとなることは自分の日常生活の中にいくらかもろがっているということを説明した。

そのような事例として、身近な個人的な体験を話した。すなわち、例えば、3月20日の日曜日に札幌市内で行われたイラクへの自衛隊派遣に反対する大規模なデモに参加した折に、すすきの近くでは黒塗りのクルマが警官のまばらな所を狙っていやがらせのように繰り返し急接近し、デモの列が乱れた体験、あるいは札幌駅前近くではホームレスらしき風貌の人から「こんなことやっても何にもなら

ないんだぞ!!」との罵声を浴び、絡まれた体験を話した。デモ隊は、かなりの数の人（主催者発表 5000 人）が駅前通りを練り歩く形になっていて逆に進む普通の通行人たちが圧倒された感じになっていたし、ヘリコプターが上空をうるさく旋回していたという状況の中での出来事だった。ホームレスらしき風貌の人がなぜ特に私に絡んだかという点については、その時の私が小学一年生の子の手を引いてそのデモに参加していたことが何か刺激を与えたのかもしれないと思ったことなども話した。

また、某財団からの助成を受けて進めているある調査で SM 系の嗜好の強い人たちが多く集まる会員制クラブにて参与観察した経験についてもこの機会に話した。ちょうど名古屋のテレビ塔からドル札をバラ撒いてつかまった 26 歳で元銀行員のデイトレーダーのことがまだ記憶に新しい時期だったが、こうした会員制のクラブには、うまくすれば、一日の株の操作で百万単位の収益を得ることも可能なデイトレーダーのように驚くほどお金があって、その使い途に困っているような階層の人が来ているということを話した。そしてフィールドワーカーは、自分と違った世界に生きている人と出会う新鮮な体験を大事にすべきだということを説明した。そしてホームレスとデイトレーダーの対比から浮かび上がってくることは階層間格差の拡大というリアルな事実であるということにも話は及んだ。

こうした体験を話したことが効を奏したのか、第 1 回で回収した「調べてみたいテーマ」として数人の学生たちからは「ホームレス」ということが挙がっていた。しかし、実際に学期末レポートのためにホームレスの調査をした結果をまとめた学生は皆無に終わった。容易に調べられるテーマではないということもあるが、彼らがその時に抱いたせつかくの問題意識を十分に受け止め切れなかったとい

うこともあろう。ホームレスというテーマ以外にもその本人が本当はやってみたかったテーマはいろいろとあったに違いない。それに対応するための準備と十分な時間とが欠けていたということだろう。これも私の指導が不十分で残念であった点である。

## (2) 取材と編集についての特別授業から

2004 年度の場合は、ジャーナリストの視点を取り入れることを重視し、第 8 回となる 6 月 7 日に、ゲストにフリー・ジャーナリストで『えぬびおん』編集長（当時）でもある斎藤克恵さんをお招きしての特別授業を行った。この日、斎藤さんは 1 コマ目に自らのさまざまな取材体験について紹介した後、2 コマ目にイラクの子どもたちの描いた絵をスクリーンで見せ、その感じたことを自分の文章で表現する課題を課している。

まず最初に斎藤さんは、自らのことを「うさびょんさいとう」と名乗り、自分の今の生活、これまでの生き方のことから語り始め、学生時代は絵の勉強をしたこと、編集の仕事に就いたこと、特に福祉に関心があってその方面の仕事をするようになって今に至っていることなどを話した。そして読売新聞道内版夕刊に「木」に関わるコラム記事の連載を担当していた時の体験を話した。この連載記事は古くからある「木」を題材としたもので、好評だったのであろうが、1998 年 4 月から 1999 年 9 月まで一年半の長きにわたって続いている。むろん単に「木」そのものを描く記事ではない。例えば、東区にある「大覚寺の乳房いちょう」にはおっぱいが出ないために周囲からいじめられ、苦勞した女性たちの祈りや願いに関わる言い伝えがある。斎藤さんは、そのことをお寺の住職や地域の人たちと会って聞き出して記事にしている。つまり、伝承を聞き出していくという基礎作業を知ってみると、出来上がった記事は短くてもきわめて凝縮度の高いものであることがわかる。

ライターは取材して得た多くのものを捨て、最後に残したもので勝負している。こうした話を聞かされると新聞記事を読む態度が変わってくるであろう。

斎藤さんは、生まれつきの脳性マヒで重度の身体障がい者の小山内美智子さん取材してまとめた「からだと健康——障害者大学」記事（読売新聞2002年11月12日家庭欄掲載）、についても学生たちに紹介した。小山内さんは『あなたはわたしの手になれますか』などの本を書いている方であり、長年にわたって道内で障がい者運動のリーダーシップをとって来られた方である。この記事を読むと、斎藤さんは普通なら踏み込みにくくて遠慮するところまで踏み込んで聞いていることがわかる。小山内さんのインタビューとしての受け答えもベテランとして心得たものである様子が記事からよく伝わってくる。

小山内さんは「いちごの会」の創設者であり、現在、西宮の沢にある通所施設、アンビシャスの所長を務めている。アンビシャスを訪れてまとめた、「自立生活支援、職員と共に」と見出しのついたその記事では「避けておれぬ性の問題」についても触れられている。例えば、「私は手も利かないし、トイレも顔も歯も人の手を借りないと暮らしていけない、口先だけで生きていようなものだけれど、一般社会で生きるっていいなあをつくづく思う」などという小山内さんの言葉をそのまま紹介している。インタビュアーとインタビュイーとの息がぴったり合っている感じがする。記事の目的がはっきりしていることもあるが、聞き手との間に基本的な信頼関係が形成されていないといふインタビューはできないことのわかるお手本のような記事であった。

また目の見えない人にも絵を描く喜びを味わってもらうために工夫している女性画家の松本キミ子さんや骨形成不全という生まれつきの難病を抱え、頻繁に骨折と手術を繰り返

す人生を歩みながら、結婚して子どもを産み、育てている安積遊歩さん取材した時の体験などにもこの日、斎藤さんは触れた。いずれの場合も相手と出会ってじっくりとコミュニケーションをとり、相手の思いや気持ち、生活体験がよくわかるようにならないと、よい記事は書けないことを示す事例であったと私は受け止めている。これは取材活動のみならず、社会調査という営み一般にも共通するたいへん大切なことであろう。

さらに斎藤さんは、アコーディオンと大きな人形を持ち出し、腹話術を使って学生たちとコミュニケーションをとるなど人と触れ合う方法の優れた実例というものを、身体を使った実際のな形で自ら示して下さい。腹話術の実演実習を指名されたTAは下手ながら一生懸命にやっけて学生たちの拍手を浴びている。アコーディオンと腹話術には正直、私たちが驚いたが、相手の緊張をほぐし、良好な関係を作り出していく道具として斎藤さんはしばしば使っているようである。よい取材や調査を実施するには笑いとなごやかな雰囲気は不可欠ということもこの日、我々は学んだ。

「イラクの子どもたちの絵を見て感じたことを文章にする」という課題はいきなり出されたものではなく、以上のようなプロセスを経る一連の流れの最後に出てきたものである。この日、提出された小レポートに目を通すと、最初から出席していた学生の中には最後に課題として出されたイラクの子どもたちのこと以外に、以上のような斎藤さんの授業から得た感動や感謝の気持ちを素直な言葉にしていた者もいた。「イラクの子どもたちに何かできることはありますか」と問いかけていた回答もあった。これなどは目の前で肉親を失う子どもたちの悲しみや痛みへの強い共感が書かせた言葉であろう。

レポートの回答は斎藤さんにその日にそのままお渡しして読んでいただいた。その後で

私も読んだ。そして「出席はとらなかつたけれども2コマ目の途中や終わり近くに教室にやって来て最後の課題だけに答えた学生の書いたものは読んでみるとなんとなくわかりますね」という話を私は斎藤さんとした。当日、遅刻して終わり近くに教室に現れ、出席の証明だけを提出した学生は多くの貴重なものを損失している。

### (3) 過去の独居老人調査、車椅子使用による 実習などから

過去の調査実習のことにも触れておく。2003年度の「質的調査方法論・同基礎演習」の時には、フィールドノーツをつけるという課題の一環として、バリアフリーをテーマにして車椅子で学内や周辺を移動してみる内容の実習を組み入れた。車椅子は江別市の社会福祉協議会から12台を貸してもらい、グループ内で交代して乗る形にした。学内のいくつかのスポットのみならず、大麻駅、大麻公民館、市役所の大麻出張所、さらに近くの大型スーパーに出かけたグループもあった。

学生たちは実際に自分が車椅子に乗ってみるという新鮮な体験を通して普段は気づかなかったさまざまなことに気づいている。例えば、本学の古い建物の中には、明らかな段差があるために単独での車椅子での移動の困難な箇所、外に出にくい箇所などがかなりあったし、傾斜のきつすぎるスロープもいくつか発見された。学生たちのまとめたレポートにはそれらを写した画像が説明の文書と共に載っている。学外に出たグループにおいてもそうした発見は多々あったようだ。車椅子の操作が慣れるまで意外と難しいということ、車椅子に乗っているといつもとは目の位置が異なっているため、見下ろされるような心理的圧迫感を感じたなどのことをレポートに書いた学生もいた。

2003年度の場合、後期に開講されたのでこの実習を行ったのは12月初旬であった。すで

に雪がうっすらと積もる状態の中で行われたので、車椅子は雪道が苦手であるということも体験されている。実習に入るに先立って、厚別区在住で車椅子生活者である我妻武さんに授業の場に来ていただいて、車椅子での日常生活をしていて感ずること、バリアフリーとユニバーサルデザインに関する基本的な考え方などについての当事者の立場からのレクチャーもしていただいた<sup>3)</sup>。

また社会福祉協議会からは、老人の身体感覚を体験できるセット（通称「うらしまセット」）も6グループ分、貸してもらった。これを装着することで、視野が狭くなる、耳が聞こえにくくなる、膝を曲げにくくなる、腕を上げにくくなるなどの不自由な身体感覚を学生たちは体験することができた。やはりそれを通して感じた新鮮な驚きのことを学生はレポートに記している。

これらの体験が効を奏したのか、このときはテーマを自由に設定した学期末の個人別の最終レポートでこれらの実習の刺激を受けたテーマを選んでまとめた学生がかなりいた。つまり、それらは正月休みに地元で駅や病院などのバリアフリー度をチェックしてきたり、お年寄りにインタビューをしてくるなどのテーマでまとめられている。

なお、以前に旧カリで「社会情報調査実習」という名称で実施していた折に、バリアフリーをメインテーマに実習を実施した1999年度（高橋教員と共同で担当）にも上記のように車椅子と老人体験セットは使用している。またこのようなテーマで調査実習を行うきっかけとなった1998年度（石井教員と共同で担当）の場合は、厚別区青葉地区という札幌市内でも高齢化率のきわだって高い地域をフィールドにして、特に独居老人の調査をしている。このときは、独居老人の皆さんにアンケート調査へに回答してもらうことを目的として面接調査に応じてもらったのだが、ケースによっては訪れた学生たちに対して長



時間にわたってライフヒストリーを話してくれたようだ。石鹼をお土産にしたのだが、たいへん歓迎してくれて、ごちそうになって帰ってきた学生もいた。地域の方とこうした交流の機会を持てたこと自体もフィールドワークの大きな成果だったといえる。

### 3. 今後の課題を実現するためのヒント

#### (1) 学生相互のインタビュー行為によって達成されるもの

以上の例からもわかるように異質な他者と出会うことに調査の醍醐味はある。このことは「質的調査」を冠する科目全般においても変わらない魅力であると考えられる。しかし現行の新カリにおける「質的調査方法論・同基礎演習」においては、予算の制約から、あるいはより正確に言えば、そのような予算しかなかったという科目設置上の基本的考え方の制約から、基本的に学内でフィールドワークを行うことになっている<sup>(4)</sup>。

むろん異質さというものは、見出そうと思えば、至るところに遍く見出されうるものであろう。他者は自分とは異なるのであり、他者のことはわからないのだから、そこまで言うなら「異質ではない他者」というものはないだろう。とにかく学内で済ませなければならぬという前提で考えたときに最も手近な存在としてインタビューの相手に選ばれることになるのは、同じくこの科目を履修している他の学生である。学生二人でペアを作って相互にインタビューし合うという実習にはこの科目の開設以来、かなりの時間が割かれてきた。初年度の2002年度の場合は特にその時間が長かったと聞いている。

質問項目を検討してからインタビューの実習に入る。当然なことであるが、学生同士で質問しあう時の質問項目というものはおよそ類似してくる。例えば、ある学生が作成したのは次のようなものだ。

名前を教えてください／今、どこに住んでい

ますか／出身はどこですか／アルバイトはしていますか。している場合は何をしていますか／好きなこと（趣味）はありますか／学校までどのようにして通っていますか／部活、サークルに入っていますか／好きなスポーツは何ですか／なぜこの大学に入ったのですか／大学では何がしたいですか／夢はありますか

こうして学生同士のペアは時間をかけてこれらのことを相互にたずねあうことになる。むろん相手のことがわかって面白いという実感を学生たちは持つだろう。特に初回の感激は大きいようだ。しかし、回を重ねるにつれて、「飽きてくる」ということが当然ながら起きる。2004年度の場合は、一つのペアあたりのインタビュー時間を片側で15分、つまり双方で30分とし、計4回にわたってペアの相手を替える形でこの実習を行ったが、様子を見てみると、とめどない雑談へと流れたケースも実はかなりあった。話が盛り上がり学生たちが楽しんでいるのならそれはそれでわるくはないのではという意見もあるだろう。

しかし、教員側が雑談の場となってしまうことを意図してこの相互インタビューの機会を用意したわけではなかった事実にはやはり注意を払っておくべきだ。楽しそうだから、盛り上がっているからそれでいいという考えはどこかいきあたりばったりであり、教育の場として考えたらやはりおかしい。何より方法的に杜撰なのがよくない。

やや斜に構えた見方をすれば、ここで何が達成されているかが問われることになる。教員側の用意した状況設定にかなう範囲内であたりさわりのないことを聞きあう技法を習得するという、およびそのような場として双方が了解し、ふるまいあうということがここで達成されている。学生たちがそれらのことになんとか気づいて緊張感を失った時、とめどのない雑談へと流れていったのではないのか。またこの時、自分たちのしているこ

とが教員側の意図を超えていることへの快感も学生側には発生しているはずだ。「そろそろ終わりましたか」という教員側の働きかけに対して「まだです！」と応じてなかなかやめなかったケースなど明らかにそうなのだろうと思われる。

それにしても状況設定として、そんなに親しくない同士で一時的に向き合っただけのだから、実際のところ、踏み込んでおかない部分にはお互いにブレーキをかけながらのインタビューとなりがちだ。その場で相手に聞いていい範囲、レポートに書いていい範囲とは何か、それは世間の常識の枠内に収まる範囲のものに他ならない。かくしてこの実習は「饒舌だが、空虚なおしゃべり」の時間の一例となる。エスノメソドロロジー系の文献を取り上げた折の専門ゼミの場ではあるが、ある学生はこの実習のこのシーンについて振り返ってみてそんなことに気づいた旨を意見として述べていた。なかなか鋭い受け止め方だといえる。ゼミでこういう意見に出会うと学生をあなどってはいけないと思う。

私は学生同士で行うインタビューを無意味とは思わない。しかし同じ学部の同じ授業を履修している仲間内のみでこうしたインタビューを重ねることの限界という点は、教える側としてはやはりきちんと押さえておくべきだろう。こうした実習をすることの根拠は汎用性のあるインタビューの技法の習得という考え方にある。それではさらにそのような考え方を根底で支える思想とは何か。そのようなことについても「質的調査」の方法について論ずるという場合、踏み込まねばならないのではなかろうか。

だが、その前に使っているテキストへの違和感を述べておこう。先に記したように初年度の2002年度以来の「伝統」として、「質的調査方法論・同基礎演習」という科目では山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』をテキストに準ずるものとして使ってき

た。この本は、CD-ROMの付録もついていて確かに便利なのであるが、授業のスタイル自体がこの本に依存しすぎているのではという反省の念を私は2003年度より抱いてきた。

この本を使用する場合、先に記したように大教室でCD-ROMの画像を全体で視聴した上で、その章の読み合わせをし、教員が解説したり、補足説明をすることが基本的スタイルとなる。このため、退屈に感ずる学生も出てしまうようだ。現に学生からの感想としては、読書による学習時間が多すぎるという不満もあった。また章によっては学生たちの生活実感からはかけ離れたことが話題になっていて、関心があまり持てない内容になっているのかもしれない。それは教員側の問題でもある。例えば、ハワイの移民の話をするなら、ハワイの歴史などの基礎知識をもっと補足しなければならない。

だが、それら以上にこのテキストに対して私が不満に感ずることは、第10章「観る側と観られる側の裂け目から——調査者のモラルと課題」など一部を除くと、インタビュー行為において調査者はどこに立っているのかという問題意識が弱く、今や質的調査のことを語る場合に欠かすことのできないエスノメソドロロジーのようなアプローチには入っていきにくいという点である。いやここでは何もエスノメソドロロジーまで持ち出さなくても事足りるのかもしれない。問題はそれ以前だ。要するにこのテキストの記述は、インタビュー行為というものに対する認識が浅薄であり、インタビューをインタビュアー自身のふるまいをも含めたダイナミックな相互行為の過程として捉えていく視点が決定的に欠落している。このことは例えば、桜井厚『インタビューの社会学』の精密で掘り下げた記述と比べたら歴然としている<sup>(6)</sup>。

もっとも『マルチメディアでフィールドワーク』は、新しい情報メディアを調査の道具として積極的に使っていこうと提案してい

る点では優れている。写真や画像の使用という方向性を強調するのなら使える部分もある。したがって今後もテキストに準ずるものとして使っていくなら、使う部分を厳選する、インタビュー行為についての箇所は補助教材を強化するなど使い方についてさらに工夫する必要がある。あくまで異質な他者と出会うことにフィールドワークの本領があるという点に留意しながら。

## (2) 「カテゴリー化の罫」への問いを深めていく

ある人を特定のカテゴリーで捉えてしまうと、それ以上のことが何も見えて来なくなる。例えば、2004年度の授業で公開インタビューのゲストとしてお招きした際に井上俊彌さんを「同窓会会長の」という形で表現したが、それは井上さんの数多い属性の一つにすぎない。彼には「同窓会の会長」以外にも「道内観光土産物業界の重鎮」とか「ヨット部OB」などさまざまな属性がある。本人がどのような属性を自己呈示するのかということとは無関係に外から勝手に定義するのは実は暴力的でおかしなことだ。しかし理屈ではそのようにわかっているながら、しばしば我々はカテゴリーで人を見てしまうという過ちを犯しているのではないか。ライフヒストリー研究などでもそうなりがちではと疑ってみる余地は大いにある。

カテゴリー化という問題に着目するなら、調査という営みについてさまざまな方面への視界が開けてくる。会員制のSMクラブで出会った人のことや札幌市内でのデモでホームレスらしき人に絡まれたという話をした第1回の授業の折に当時、出たばかりの好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』のことを紹介し、特に三浦耕吉郎論文「カテゴリー化の罫」については後日その内容を詳しく話したいと考えていることを学生たちに告げたが、残念なことに結局、果たせない

ままになった。敢えてこの論文に言及したのは、私が読んで感銘を受け、フィールドワークというものについての認識を新たにした部分があり、その面白さを学生たちにも伝えたいと考えたからに他ならない。

この三浦論文「カテゴリー化の罫」は、被差別部落の聴き取り調査をした後、相手から電話がかかってきてさっき話したことについて書かないで欲しいと言われた体験の紹介から始まっている。そして被調査者からの要望(クレーム)をついつい「圧力」と感じてしまう調査者としての自分の認識のありように三浦さんはこだわり、そこから問題を掘り下げていく。かくして「調査者がみずから範囲を設定し、それに依拠して調査をすすめてきたフィールドに対して、当のフィールドのなかから、そのフィールドの範囲を変化させようとする動きが現れてきたという点」にこそ要望(クレーム)を「圧力」と感じてしまう理由があったことが発見されている。

その上で、被調査者の対応次第でフィールドはその境界を広げる方向へも狭める方向へもアメーバのように変化させるということが指摘されている。つまり、調査のフィールドの範囲はフィールドワーカーの側が勝手に決められないのである。考えてみると、調査ができるか否か、調査させてもらえるか否か、決めるのは調査する側ではなく、調査される側なのだ。その意味で「社会調査というものが本性的に纏う調査対象に対する受動性」が浮き彫りとなる。興味深いことに三浦さんはこの受動性の中に逆に聞き取り調査に特有の利点を見い出している。

「聞き取りという方法の特徴のなかで、往々にして見落とされがちなのが、調査者が、被調査者から面と向かって当の調査に対する批判を浴びせられるチャンスを日常的に提供している、という点である。それは、別の表現を使えば、聞き取り調査は、その調査方法のなかに、被調査者が直接、

調査や調査者に対する批判を行うことができる回路を内蔵しているということであり、他の調査方法と比較して特筆されてよいものである」(214頁)

そして三浦さんは自分自身が「部落で聞き取りを行いながら、心の中では黙々と部落の人にたいするある種のカテゴリー化実践をおこなっていた」(228頁)ことに気づいていく。これは調査拒否されるという体験によって「フィールドの一部を失うことと引き換えに、真正面から調査拒否を受け止めること」を取行したからこそ見えてきたものだろう。

三浦さんが聞き取り調査と呼んでいるものをここで質的調査と置き換えてもいいであろう。カテゴリー化の罫に着目した考察はこうして質的調査が明示的に暴いてしまう社会調査というものの本源的な受動性についての認識という地点にまで辿りついた。そうだとすると、調査する側が「調査を設計する」などというのはおこがましいことで、調査できる範囲の確定は調査される側こそが行っているのである。さらに敷衍すればこうも言えるのではないか。あたりさわりのないことなら調査拒否は起こらない。つまり、あたりさわりのあることを調べるからこそ質的調査は有意義なのだ。

話をライフヒストリー研究に戻そう。カテゴリーで括るのではなく、一人の個人として向き合うことが大事になる。個人が辿った経験に関心を払い、その個人が自らの生活や自らを取り巻く世界をどのように解釈しているかを明らかにすることがライフヒストリー研究の根本であり、個人の属する社会的属性や社会構造ではなく、「まるごとの個人」に視点を係留することを尊重しなければならない。

ここからは質的調査に特有のメリットという問題も導出されてこよう。個人の動的な変化の部分、矛盾を含んでいる部分などがよく見えてくるのが質的調査なのである。ケン・プラマーは『生活記録の社会学』にて次のよ

うに述べている。

「ほとんどの社会科学は、一般化をめざすことで、対象となる経験や社会的世界に秩序や合理性を押し付けてきた。(中略)けれども現実には、そうした経験や社会的世界はもっと多義的で、もっと複雑で、混沌としているものなのだ。研究者は対象者の生活が首尾一貫していないことが多いにもかかわらず、その反応に一貫性を見出そうと努める。これに対して生活史は、日常生活の中で演じられる混乱、多様性、矛盾を発見するのにきわめて有効な方法である」(102-103頁)

我々が自分自身のありのままを振り返ってみても気づくように、現実の人間の「考え」や「思い」や「感情」は固定していない。それらはその時々で常に変わるものであるし、矛盾することもしばしばである。人生を歩む中で個人は絶えず成長している。あるいはまた、挫折したり、変わったりをする。その体験はその個人自身だけではなく周囲や社会をも変えることがある。逆に社会のさまざまな出来事が個人のライフヒストリーに影響を及ぼすこともある。そのような視点を導入し、例えば、聞かれてあたりさわりのないわけではない場合には激しい拒否の態度を示すことなども含めて、ありのままの人間の姿を出来る限りありのままに捉えていくべきなのだ。そうしたことのできる方法として質的調査は優れているのである<sup>(6)</sup>。

### (3) アクティブ・インタビューという視点

対象者から激しく拒否の態度を示された調査者は動揺するだろう。当初設定したフィールド自体が変わらざるを得なくなるのだから。そして自分のそれまでの認識の枠組みをも再考するようになるだろう。先に「異質な他者」と出会うことこそ調査の醍醐味であると述べたが、その「異質な他者」には調査す

る側にとっての自分自身のことも含まれているのではないかとここで言い添えておきたい。質的調査とは自分の中の「異質な他者」に出会う可能性を含んだスリリングでダイナミックな過程として存在することになる。

また先に学生相互のインタビュー実習をすることの根拠を問うなら、それは汎用性のあるインタビューの技法の習得という考え方に基づいている、それではさらにそのような考え方を根底で支える思想とは何かという問いを出しておいた。これまで記述してきたことを踏まえて、この問いへの回答を明確に語る段に至っているように思う。そのヒントになる言及が、ジェイムズ・ホルスタインとジェイマー・グブリアムによる共著『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』には、多々見られる。

「伝統的なアプローチにおいて、インタビュアーが回答者の経験について質問するとき、調査対象者は基本的に受動的な「回答の容器」として考えられてきた。彼らは事実や、それに関連する経験内容の貯蔵庫なのである。たとえば、特に注意を要するインタビューのトピックを取り扱ったり、頑強に抵抗する回答者に対応する場合には、調査者は対象者の経験内容の情報を正確に把握するのが困難であり、こうしたことはしばしば経験することである。にもかかわらず、そこで得られる経験内容の情報は、原則として調査対象者という回答の容器の中で汚染されずに保持されているとみなされる。したがって要はインタビュアーと回答者とのあいだに、オープンでひずみのないコミュニケーションを導くような環境を考えたり、質問を工夫したりさえすればよいのである」(30頁)

我々はここで『マルチメディアでフィールドワーク』におけるインタビューについての記述がまさしくここに紹介されているような

ものとして典型的であることに注意すべきだろう。「インタビュアーと回答者とのあいだに、オープンでひずみのないコミュニケーションを導くような環境を考えたり、質問を工夫したりさえすればよい」という発想が出てくるのは、インタビュー行為を動的な相互作用の過程としてではなく、静的なものとして捉え、調査対象者のことを「基本的に受動的な「回答の容器」として」考えているからである。それは「異質な他者」とはけっして出会えないインタビューだといえる。

実習授業における学生相互のインタビューは人為的な形で状況を設定して行われているし、実習の後で学生たちにその事実を自覚させないとならないのだが、現実になされるインタビューのシーンはもっと多様である。つまり、意外な展開の可能性を常に有しているという意味で波乱含みであり、ドラマティックである。以下で既存の研究からそうしたシーンのいくつかを取り出してみよう。

波乱含みと言えば、「調査する—調査される」という関係も固定したものではない。そこに「逆転」が起きうるといふ事例の指摘を、例えば、長年にわたってハンセン病者の研究を進めてきた蘭由岐子『「病の経験」を聞き取る』の中に見い出すことができる<sup>7)</sup>。蘭さんは、ハンセン病者の聞き取りをしようとした際に、自分の出したお茶をのむかどうかを凝視されていたことに着目して、次のように述べている。

「わたしだけが「調査者」という役割を遂行していたのではなかった。通常の社交においてはささいな行為が、病者との初対面の相互作用のなかで「しっかりと観察されてい」たのである。そこでは調査者と被調査者との位置関係は逆転している。調査者であるわたしは、もはや病者に関する質的データを収集しにきた調査者ではなく、そのハンセン病観や病者観を瞬時に調査されている「被調査者」なのである」(60頁)。

またライフヒストリー研究には、これまで無視され、聞かれることのなかった被差別者やマイノリティの声を聞き取れるという利点がある。ライフヒストリー研究は、公的な統計には数え上げられない、あまり一般的には知られていない社会の周辺に位置する人々を対象にすることが出来る。被抑圧者にとっての「語ること」の意義は小さくない。自らの社会的世界に意味を与え、さまざまな問題を明らかにするだけでなく、自己理解を促進し、自らの生き方を創造する助けとなる。これらは「語ること」それ自体の機能である。言葉は現実を構成する力を有している。言葉によって語ることは、語られる現実の名づけをし、現実を現実たらしめ、さらに他者にそれを伝え、共有することを可能にする。

蘭さんも述べているが、本来、ライフヒストリーの聞き取りをさせてもらった側こそがお礼をいわずに終わるのに、インタビューが終わると、先方からお礼を言われることが結構ある。特にそのように「語り」をするという体験が当人にとって新鮮だったケースなどに多い。語り手にとって自己の世界を秩序づけることができ、それが語り手にあるカタルシスをもたらしたからだろうか。すなわち、ライフヒストリーの聞き取りはセラピーと同様の効果を上げることもあるのだ。

しかし、他方で聞き取り過程における「調査者—被調査者」の関係が「支配—服従」の関係になってしまう可能性が大きいという問題はやはり深刻である。時にはそれは調査という名の暴力にもなりかねない。これについては、ここでは好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』などの鋭い指摘を参考に整理しておく。

例えば、聞かれたくないことを聞き取るとは被調査者に苦痛をもたらす。語り手が「記憶の奥にそっとおしとどめておきたい、出来れば忘れてしまいたい」ようなことを想起さ

せ、「いま—ここ」で苦しみを強いてしまうことがある。

聞き取りの場に充満する「語らせるワーク」の問題もある。「語らせる権力の行使」は単に語り手に口を開かせることではない。調査者が聞き取りたい事柄についてのみ語らせることにもなりかねなくなっている。例えば、個々人のライフヒストリーをより大きな歴史に結びつけようと、その出来事のクロノジカルな時間をしつこく確定しようとする。それは相手に「警察の尋問みたい」との感想をもたれるような聞き取りである。この場合、よく見られるのは調査する側の用意した「モデル・ストーリー」に相手の発言を封じ込めてしまう、水路づけてしまう事態である。この落とし穴は気づきにくいのではないか。

またそれとは逆に「語らせる権力」を行使していながら一方で「語らせない権力」をも行使してしまうことがある。会話分析においては、日常会話でも一般的な「割り込み」と「沈黙」のほかに、語りの意味内容を聞き手が一言で要約してしまうこと（「要するにそれは〇〇ということですね」などによって、語り手の語りと思考を停止させるという統制を知らず知らずのうちにってしまう場合などが明らかとなっている。

このような問題を回顧する時、これまでのいわゆる客観主義の名の下に調査は何を達成してきたのかを問いたくなる。文化人類学においてはこのような反省の必要性がいちはやく提起されたのではなかったのか。ある人々の生活や文化を「野蛮」と捉える「文明」のまなざしの方こそが問われねばならないのだという形で、博物学のまなざしが支配のための知を形成することはフーコーらが明らかにした。自分たちの立脚基盤を疑わないエスノセントリズムの弊害が暴かれて久しい。

それに比べて社会調査においては未だにいわゆる客観主義が横行している。伝統的なアプローチの社会調査は何を達成してきたの

か。例えば、研究者側の文化の優位性を意識的・無意識的に再生産してきたのではなかろうか。そのように考えていくと、研究者の立場とその限界を明示し、研究対象とされる人たちとの間の権力関係を問題視していく方法論というものが必要になってくる。エスノメソドロジーとはまさしくそのような期待に応える斬新なアプローチとして受容され、広がっている新しい方法論といえよう。

#### (4) 「社会調査士」資格より広いものとしての質的調査

ここで思い起こされるのは、2004年3月15日に慶応義塾大学の有末賢さん、日本大学の後藤範章さんをお招きして行った第18回社会情報調査の方法についての研究会のことである。有末さんはライフヒストリー研究の第一人者として優れた業績をお持ちだが、この研究会の折に「生活史法に基づく教育実践」と題してなされた有末さんによる報告中のいくつかの発言は私にはたいへん興味深いものだった。

この記録については今年度の学部運営費によって学生にテープ起こしをしてもらった原稿が手元にある<sup>(8)</sup>が、その中で有末さんは「慶応は社会調査士の資格についてまだ何も準備をしておらず、札幌学院などと比べてたいへん遅れています」と断り、「しかし遅れているからこそ言えることもあるのではないかと考えています」として、特に質的調査については、ある授業の履修をしたということを資格要件とすぐさま結びつけて限定すべきではない、それは資格よりはるかに広いものだという趣旨のことを述べている。この報告での有末さんの言い方はていねいであるが、なかなか辛らつであり、「社会調査士」への苦々しい思いと皮肉がたっぷりと込められていると思われる箇所もいくつかある。

もちろん、それはライフヒストリー研究者として真摯に現在起きている問題と向き合お

うとするがゆえの辛らつさである。「社会調査士」と同音異義語の「社会調査史」のこことを持ち出すなど、インパクトの強い発言が多々みられたのだが、私にとって特に強く印象に残っているのは、ご自身がお連れ合いを亡くされた折に当事者としてたいへんつらい思いをし、自助グループに通ったり、ネットのサイトで仲間と交信したという体験に触れたことである。その上で調査者としての立場はやはり当事者とは違うと述べたことである。それらを受けて終盤部分では次のような発言がみられる。

「後藤先生のご紹介された集合的写真観察法というのはたぶんユニークなのだろうとは思いますが、ただ私はそれも結局、なかなか標準化されないのではないかと思います。そしてそれでいいのではと思っています。これはエスノメソドロジーの場合も同じです。要するに何が質的調査の方法として代表なのかとはなかなか言えないのではないかということです。エスノグラフィーをやれば質的な調査なのか、参与観察について講義すればそれが質的分析のための方法に関する科目なのか、質的調査の方法は実に多彩であり、量的調査に比べると確定しにくいということです。これは私にはよくわかりませんが、ともかく資格のために限定的に設定されてしまっているものがかなりあるのではないかという印象があります。これはこの学問が元々有している問題だと思うのですけれど、私は質的調査法というのは、社会学とか社会調査よりも範囲が広いと考えているのです。質的調査というものはあらゆるものと隣接しているのです。例えば、文学、歴史学、精神分析、文化人類学、マスコミ論、メディア論などまで含んだものになるべきであり、範囲はものすごく広がります」

またその少し前ではこんなことも述べてい

る。これは相手との関係性のとり方でインタビューは大きく様相を変えることに触れて、相性のよくない相手を無理に対象者にする必要もないといったことが語られた後の言及である。

「それから、これも私、自分自身への自戒を込めて言うのですが、教師とか学生とか調査者という立場は調査においてどういう役割を果たすのだらうと思うのです。今までにもそれを強調して言ってきたのですが、どうも質的調査をしていて実際的な場面に会いますと、教師とか、学生とか、院生とか、調査者とか、そういう肩書きがものを言うのではないのです。資格があるか否かも関係ないのです。一人の人間という立場で相手と関わっているわけで、だから教育実践という問題なのですが、実際には人間としてどう関わるかというのが一番重要なことではないのかと思います」

いずれも非常に示唆深い重要な指摘であるといえよう。ここで述べられていることは先に紹介した斉藤さんによる、人と深く関わることを重視した取材の方法についての特別授業の趣旨とも大いに重なる。多くのフィールドワークの体験をお持ちの有末さんのこのような意見に私は多くの点で共感し同意するし、本学の「質的調査方法論・同基礎演習」の担当者としてこの授業を有末さんの言われるような幅広いものにしていかねばならないと感じている。

#### 4. 当事者の「痛み」と向き合うフィールドワークはいかにして可能か

インタビューに際して我々が得る「語り」とは常に動的な関係性の中で構成されたものである。インタビューする側とされる側との関係性次第でそれはいかようにも変わりうる。従ってそのインタビューを通してどんな結果が得られたかということから逆に両者が

どんな関係性を形成しているかが問われるということにもなる。

先にも述べたようにライフヒストリー研究には、これまで無視され、聞かれることのなかった被差別者やマイノリティの声を聞き取れるという利点がある。社会の周辺に位置する人々の「声なき声」を対象にすることが出来るという、この利点を活かした場合にこそ、質的調査というアプローチは特に大きな意味を持ってくのではないか。

技法的なことを先に言えば、ライフヒストリー研究においては当事者の生活世界のリアリティに迫ろうとするのであり、「語り」の中の繰り返し語られること、「語り」に力のこもっていること、声の調子が変わることなどに注意を払う必要がある。それらにはその人にとって意味のある体験が含まれている場合が多い。質問紙調査における「濃い記述」と同様の意味での「濃い語り」がインタビューされる側に認められる場合、何かその人にとって核心的な記憶が引き出されていることが多いといえる。

このような「濃い語り」をデンジンは、エピファニーという概念で説明している。そこにいうエピファニーとは「人生における重要な転換の契機」のことだ。安易に一般化して語ってはならないひとりひとりの内的な時間の流れというものがある。個々人の個別の体験におけるそれぞれの「思い」をできうる限り、くみとるような繊細な感受性がフィールドワーカーには求められている。肝心なのは、耳を研ぎ澄まして相手の声を聞くことだ。2003年度、2004年度の授業ではそうした優れた調査の一例として、例えば、谷富夫さんが提示している沖縄の高校球児の事例を紹介した。

話がここに至ると、質的調査というものは「臨床社会学」を名乗るアプローチと多くの接点を有していることに気づく。「臨床」の原義はベッドサイドのことだが、ここで問題とし



ているのは必ずしも本当にそこにベッドがあるような医療現場ばかりとは限らない。「臨床」を対象として捉えるなら、福祉、教育なども含めて何らかの意味で弱い立場にいる相手との関わり方を問題にするような社会学のことになる<sup>(9)</sup>。

それではベッドサイドに求められる知とは何か。サイエンスとアートが分離していなかった近代以前の状況はヒントになる。例えば、病者の宗教的な「癒し」が近代以前の医療現場では尊重されていた。「死」とは死に行く患者のものであると同時に、その人を取り巻く周囲の人々の問題でもある。関係性の問題として「死」を考えることを近代科学としての医学は忘れてしまった。昨今のターミナル・ケアの実践はそのような反省に立って関係性を取り戻そうとしている。よい死に方の研究とは我々自身のよい生き方を探ることにもつながっている。相手との関係性によって成立するインタビュー調査に関わる知というものは、臨床社会学的観点を活かして構築されていかねばならないはずなのだ。

さて、以上を踏まえると、質的調査の教育課題として他者の「痛み」への感受性を磨くということが浮上してくる。ベッドサイドに求められる知とそれは類似してくる。三浦論文「カテゴリー化の罨」については、調査拒否という現実からこれだけのことを学べるのかという感銘を強く受ける。カテゴリーが有してしまう暴力性という問題は根が深い。質的調査といえども、通常は何かタイトルを掲げて調査を行う。例えば、「部落民」、「障害者」、「アイヌ」、「ハンセン病患者」等々。こうしたカテゴリー化自体、実は当事者にとってあたりさわりのないものとはならない場合が多いのである。もし「部落民」と括弧をしないとしたら他にどんな表現の方法があるのかと悩む。調査テーマのネーミングとは実はなかなかの難題であることにここで我々は気づかざるを得ない。しかし本質的な問題はむしろ

そんなことではない。定義される側の被る「痛み」への感受性が求められているのである。自分の失敗の体験をきちんと見据えながら、当事者の「痛み」を引き受け、悩みを安易に解消してしまわぬことの大切さを説いていく三浦さんの筆致の鋭さには感心する。

## おわりに

本稿で明らかにしてきたことのエッセンスをまとめよう。調査のフィールドとはフィールドワーカーがさまざまな人と出会ってさまざまな反応に直面する中で定まっていく動的なものだということ、拒否というメッセージを手がかりにして調査する側の抱える問題を読み取っていく利点があるということ、そのような反省的な方法を内在させている点で質的調査は積極的な意義を有していると考えられること、少なくともこの三点は三浦さんの指摘の中から学び取れることとして挙げておくべきだろう。

有末さんが質的調査というものの広さについて言及していた点も大いに考えさせられる。その場合、「社会調査士」という特別の資格を持った人間としてインタビュー調査に臨むこと自体がいかなる効果を生み出すのかという問題は、権力関係ということに鋭敏な社会学者であれば、気にならざるを得ない。「一人の人間という立場で相手と関わっている」ということを意識するなら、「調査する一される」関係を権威で固定してしまう方向性をとることは邪道だといえよう。

とはいえ、有末さんがこの報告に際して最初の方で「別に社会調査士認定制度にいちやもんをつけてやれとかそういう気持ちは毛頭ありません。資格を認定するのはとても大事だと思います。大学、あるいは社会学部・社会学系のひとつの戦略といえますか、大学を経営する上でこうした学問分野を維持、発展させていくという時に、大学によっては社会調査士というものの必要性が強く出て来てい

るというのも偽らざる事実だと思います」と述べていたことにも注意を払っておきたい。

今やサバイバルゲームに多くの力を割かねばならない経営環境にある地方私立大学に身を置く者として、私も基本的にこの考えに同意せざるを得ないようだ。ただし社会調査ないしフィールドワークというものの本来の魅力は、「社会調査士」資格に還元されるものではけっしてなからうし、フィールドワークの醍醐味を安易な資格制度化によって殺ぎ落としてしまうことはできないはずであると考えていることも同時に言い添えておこう。調査の方法を学ぶ学生たちにもそのことをしっかりと伝えたい。とりわけ、資格取得のみを目当てに履修登録している学生たちに、いずれにしても異質な他者と出会う面白さを認識させることこそ、質的調査の教育課題として重要なものではなからうか。

#### 注

- (1) 少し列举してみよう。実際に調査者がフィールドにおいてまなましい状況に関わる場合に方法としてよく用いられるものに参与観察法がある。この場合、調査者の参与自体が状況を変えていくことは避けられない。エスノメソドロロジーというアプローチはその点について特に鋭敏である。調査者自身がどのような立場でどのようにインタビューをしているのかが問われることになる。ここではインタビューという行為自体が動的なものとして捉え直されている。インタビュー調査についてさらに言えば、昨今社会学者の間で支持の増えている構築主義による考え方からすると、全ては「語られたもの」以上ではないのであり、何か本質的なものが実在するわけではない。他方、調査者が状況に直接関わらない方法とされているものとしては、写真や動画の画像によってドキュメントを記録する方法がある。また会話分析という方法もあるし、日記や手記や自伝のような過去の記録を資料として役立てる方法もある。
- (2) それぞれたいへんお忙しい中、学生の教育のためということで、快く協力して下さった皆さんにはここに改めて感謝申し上げる次第である。
- (3) この時の謝礼については、2002年度に私が留研で不在だったこともあって、予算的な用意をしていなかったため、担当の私と石井教員が連名で学部運営費からの特別支出を申請したが、学部運営会議であえなく却下されている。結局、我妻さんにはボランティアで来ていただいた形になっている。そのような場合もあるかもしれないという条件で快く引き受けてくれた我妻さんには本当に感謝している。
- (4) 「質的調査方法論・同基礎演習」を学内に限定して行うという位置づけについては、応用的な「質的調査設計・同演習」との差異化をはかりたいという或る思惑が先にあり、そこから設定された気配が濃厚である。学外を視野に入れて異質な他者と積極的に出会うことこそが「方法論」としても「基礎演習」としても重要であるという観点を強化するさまざまな工夫でこの不備を我々は補ってきた。
- (5) 例えば、「対話的構築主義」という考え方を桜井は提示している。これは、桜井の造語だが、インタビュー調査の魅力というものをも最大限に引き出す考え方といえよう。
- (6) 個人から「パーソナリティ」や「態度」や「社会構造」だけを切り取ることはできないはずだ。量的な質問紙調査はカテゴリーにしか関心を示さないが、以上の観点からすれば、反省が必要になる。
- (7) 2005年1月28日に本学にて開催された第19回社会情報調査の方法に関する研究会では、蘭由岐子さんとフリージャーナリストの武田徹さんをお招きしている。この記録は本誌次号に掲載予定。
- (8) この研究会の記録は、本誌のこの号に掲載する予定でいたが、諸般の事情から果たせず、残念である。次号をお待ちいただきたい。なお、大急ぎのテープ起こし作業を12月中に依頼通

りに仕上げてくれた、斉藤克仁、花田隆浩の両君には深く感謝したい。

- (9) 臨床社会学については、臨床を「対象」として捉えていくアプローチのほかに「方法」として捉えていくアプローチもある。

#### 参考文献

- 蘭由岐子 (2004) 『「病の経験」を聞き取る ― ハンセン病者のライフヒストリー』 (皓星社)
- 有末賢 (2004) 「生活史法に基づく教育実践」, 於札幌学院大学, 2004年3月15日, 第18回社会情報調査の方法に関する研究会での報告, 未発表
- ノーマン・K・デンジン, 関西現象社会学研究会編訳 (1989 → 1992) 『エピファニーの社会学 ― 解釈的相互作用論の核心』 (マグロウヒル)
- ジェイムズ・ホルスタイン, ジェイバー・グブリ

- アム, 山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行訳 (1995 → 2004) 『アクティヴ・インタビュー ― 相互行為としての社会調査』 (せりか書房)
- 三浦耕吉郎 (2004) 「カテゴリー化の罫」, 好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』 (世界思想社) 所収
- ケン・ブラマー, 原田勝弘・川合隆男監訳 (1983 → 1991) 『生活記録の社会学 ― 方法としての生活研究史案内』 (光生館)
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学』 (せりか書房)
- 谷富夫編 (1996) 『ライフヒストリーを学ぶ人のために』 (世界思想社)
- 山中速人編 (2002) 『マルチメディアでフィールドワーク』 (有斐閣)
- 好井裕明・山田富秋編 (2002) 『実践のフィールドワーク』 (せりか書房)